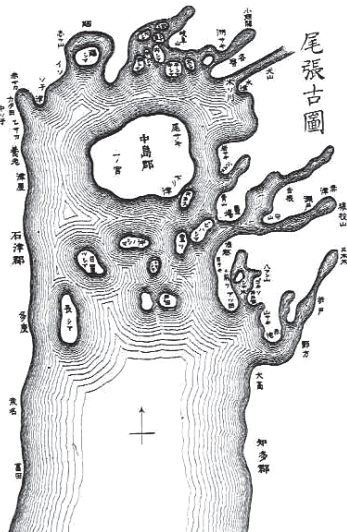


## 街道を歩く (3) 鎌倉街道 二村山～古渡

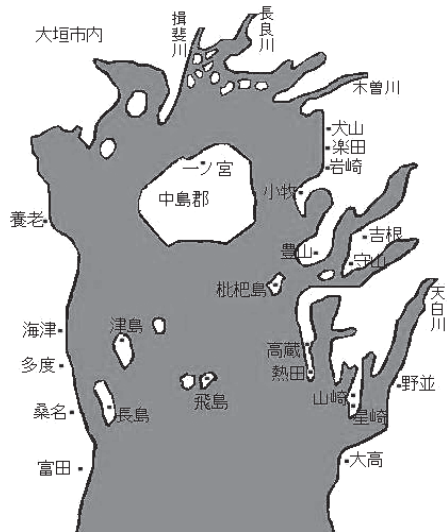
佐々木 教祐

### 1. はじめに

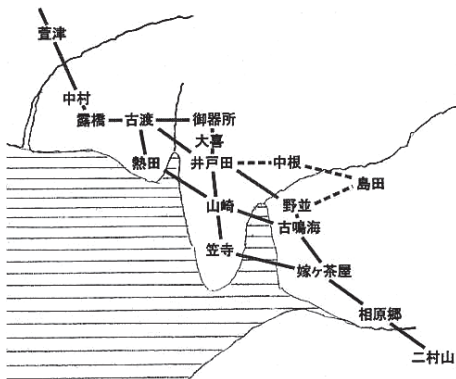
健康文化50号から始めた鎌倉街道の道探しとウォーキングは、豊明市の二村山から始まって私の育った三河を歩き浜名湖に達した。今回からは西を目指して尾張を歩くことにする。



尾張の国古絵図



古絵図を分かり易く描いた



昔の尾張の海岸線はどうなっていただろうか。養老元年(717年)に描かれたとされる名古屋周辺の古地図が三河の猿投神社から見つかった。この古地図を見ると濃尾平野はすべて海の中である。海が内陸深くまで入り込んでいるため天白川の川幅が広く、熱田が半島の先端にあり、大きな島として一宮周辺が描かれ、枇杷島、津島は文字ど

おり島である。前ページの図は名古屋の鎌倉街道の模式図<sup>1</sup>である。名古屋市の防災マップの中の洪水ハザードマップに100年に1回程度起きる大雨（24時間総雨量423mm）の天白川が氾濫した場合のマップが載せてあるが、1000年前の街道を推定するのに役立つ地図である。

## 2. 二村山～相原郷～嫁ヶ茶屋

「桶狭間の戦い」は永禄3年（1560年）に行われ、2万5千といわれる大軍を率いて尾張に侵攻した駿河の今川義元に対し、尾張の織田信長が少数の軍勢で本陣を強襲し、今川義元を討ち取って今川軍を退却させた。戦のあと東海道の君臨していた今川氏が没落する一方で、勝利した織田氏は美濃・伊勢から畿内の制圧へと急成長し、戦国時代の重要な転機となった。今川方は鎌倉街道を通して行軍し、前夜には二村山近くの沓掛城に泊まり、街道を離れて大高方面に向かったとされる。織田軍は熱田から後述の上ツ道を駆けたらしい。名鉄中京競馬場前駅を南に出て国道1号線を横切り200mほど南へ行くと「桶狭間古戦場伝説地」がある。今川義元が戦死した場所がここである。その西にある高德院境内には義元を供養する石碑がある。また、ここより西南西に1kmの所に「桶狭間古戦場公園」があり、近くの長福寺には義元の位牌や木像が安置されている。戦いはこの付近一帯で行われたものと思われる。

二村山には鎌倉街道碑、源頼朝歌碑などがあり、鎌倉街道の名所で標高72mの尾東随一の景勝地で平安時代以後旅人の歌に詠まれている。更科日記（1060年）・十六夜日記（1279年）・東関紀行（1242年）・海道記（1223年）などの紀行文や阿仏尼・源頼朝などの歌に詠まれて有名である。頂上に展望台があり、360度の見晴らしが利き、名古屋から三河にかけて展望でき、遠くに御嶽山、伊吹山が見える。源頼朝の歌碑には次の歌が刻まれている。「よそに見しをざさが上の白露を たもとにかくる ふたむらの山」。鎌倉街道は二村山を下りると、藤田保健衛生大学の駐車場に出て大学構内を濁池の南側を通して愛知用水を渡り真っすぐの道を葡萄畑を左に見て進むと、鎌倉街道がこの地を通っていたことを後世に残そうと「鎌倉台中学」と名付けられた学校を左に見て進み八尾八幡社・蔵王権現の近くを通して扇川に出る。西に向かい第二環状自動車道の下をくぐり相原郷に着く。この地方は陶器の産地で扇川はその積み出し港だった。諏訪社のすぐ前の街道跡の歩道を西に進み、幹線道路を横切り細い道を進む。浄蓮寺を左に見て進むと右手に墓地がある。まっすぐ進み自動車学校で北に折れ新海池の西に出る。丘陵の裾野を辿って歩く道だ。新海池は1634年造られた貯水池で、6世紀頃の古墳である赤塚、大塚古墳が池の西側にある。

伝治山交差点の付近から北西の部分が「嫁ヶ茶屋」と呼ばれていた所だ。ここから瑞穂台地や笠寺台地に向かうには天白川の流れている低地帯を越えなければならないが、この低地帯には海水が入っており「鳴海潟」と呼ばれていた。この潟を渡るときは潮が満ちてくるのを気にして走ったり、潮が満ちているときは何時間も待ったりと旅人泣かせの場所だったようだ。この潟をわたる道は大きく3本に分けられる。

### 3. 嫁ヶ茶屋～古鳴海・野並～山崎（中ノ道）

丘の上にある伝治山交差点から野並方面に幹線道路下って行くと八幡社があり、立札には「当神社は、鳴海本貫の古邑であり、古代鎌倉街道が通じていた歴史をもつ、古鳴海地区の鎮守である」と記されている。この辺りが古鳴海で、江戸時代に東海道ができたとき、ここの住民が鳴海に移動したので、古い鳴海として名前を残したようだ。古鳴海から幹線道路をさらに下ると野並の交差点の付近に地下鉄の駅がある。さらに真っすぐ進むと登り坂になるが、すぐ右手の細い道を100mほど進むと八剣社がある。八剣社は、野並村が旧熱田大神宮大宮司であった千秋家の領地であった関係から熱田神宮にある八剣社の分神として当地に祀ったのがその始まりのようだ。この神社の北側の道が鎌倉街道の遺構のようだ。古鳴海と野並村に船着き場があり、対岸の船着き場は鳥栖八剣社と村上社付近にあり、村上社の境内には、幹回りが約10.8m、樹高が約20mにおよぶ巨大なクスノキがある。樹齢は千年と云われ、昭和62年（1987年）に市の天然記念物に指定された。この樹は、古鳴海と桜の地を結ぶ、船人の目印になっていたと伝えられる。鳥栖八剣社の南の道を真っすぐ地下鉄桜木町駅方面に進み名鉄の踏切を越えて湯谷地蔵の前を通り、旧東海道との交差点を通る鎌倉街道跡といわれる道を進むと白豪寺に突き当たる。古来、ここ呼統一帯は四方を川と海に囲まれた巨松の生い茂る島として松巨島（まつこじま）と呼ばれ、尾張の名所であった。白豪寺の境内は松巨島の北西部に位置し高台地の下は「年魚市潟（あゆちがた）」と云われていた。最初の文献にあらわれたのは、日本書紀草薙剣のことを書いた条に、「劍今在尾張国年魚市郡熱田」とあるのが始めと云われている。奈良時代に至り持統天皇が三河国へ行幸された時、高市連黒人も随行し「桜田へたづなき渡る年魚市潟 潮干にけらし鶴鳴きわたる」の歌もその時に詠んだと云われ、万葉集第七巻には「年魚市潟塩干にけらし知多の浦に 朝こぐ舟も沖による見ゆ」という歌もあり、歌枕として有名な地となった。「年魚市」は『あいち』と転じて県名の語源になったと云われる。白豪寺の北の石垣の下の道が、その面影を残す所と云われている。ここから丘を下って

山崎川を越えて井戸田に向かう。

#### 4. 嫁ヶ茶屋～古鳴海・野並～井戸田（上ノ道）

天白川のさらに上流を渡る道として上ノ道があり、直接井戸田に向かう道だ。天白川を平子橋で渡り、小高い丘ににある西八幡社へ向かい、階段を上ると背中あわせにある宝蔵寺の前を抜けると公民館の前に「中根銅鐸発見地」の立札がある。丘を下り新瑞橋方向に進むと山崎川に出る。南側の堤を歩き師長小橋を渡って北の堤を道の終りまで行くと地下鉄妙音通駅から100mの所に出る。藤原師長公謫居（たつきよ）跡の碑の立つ鳴川稲荷が左にある。治承3年（1179年）太政大臣藤原師長は平清盛に嫌疑をかけられここ井戸田村に流され、近くの龍泉寺で出家し『理覚』と名を改め、琵琶を良くするので徒然に弾いていた。罪が解けて京へ帰るとき、側に仕えていた村長の娘が「白菊の琵琶」を形見に貰った。その琵琶は熱田神宮から尾張徳川家に伝わり消失したと伝わっていたが、平成22年宮内庁に所蔵が判明した。師長は死後妙音院の院号をさずかったのがここの地名の起こりと云われている。

#### 5. 嫁ヶ茶屋～笠寺～山崎（下ノ道）

時代が下だり陸地が広がると笠寺観音（笠覆寺）の南側を回って山崎から井戸田に至る下ノ道が使われるようになる。伝治山の交差点から西に向かって下る幹線道路を通り三王山の裾を通り、江戸時代の東海道に重なり、天白川を渡る。昔の広大な笠寺観音の寺域を迂回するため旧東海道から西に折れ名鉄名古屋本線の西側を北上して白豪寺に至る中ノ道に繋がる。

#### 6. 井戸田～大喜～御器所～古渡（瑞穂台地の道）

鎌倉街道は瑞穂台地の東の端に位置する井戸田から台地を真っすぐ北に進み、御器所にある尾陽神社で西に折れて東別院に向かって進む。この付近は古渡と呼ばれ、名古屋台地の中ほどにある。この台地は南部を熱田台地と呼ばれており、古渡から台地の南の端にある熱田の宮への道も旅人によく利用されていた。

「藤原師長公謫居跡」の碑の立つ鳴川稲荷の小さなお堂を左に見て、妙音通を越えて坂道を登って行くと「龍泉寺」がある。行基が開基した薬師寺という大きな寺があり、密教の道場として5庵があったが、応仁の乱のころ龍泉庵のみ残り曹洞宗に改宗し龍泉寺となったと云う。その門前に「亀井水」の碑があり、亀井の名前は近くに津賀田神社の社守であった亀井忠太夫の屋敷があったこと

から名づけられようだ。源頼朝は久安3年（1147年）誕生し、産湯に薬師寺、龍泉庵の井戸水を使ったとの言い伝えがある。さらに進むと長い境内を持つ「津賀田神社」が右手に見える。平安時代以前に創建され、海が近く入り江であったことから「津潟」が名前の由来のようだ。「大喜寺」は本尊が大同年間（806～810年）頃の作なので奈良・平安時代に創建された古寺と推定される。山手グリーンロードに削られたように立つ「田光八幡社」は延暦元年（782年）熱田神宮の神官物部公彦正が建てたのが始まりで、尾張名所図会によるとこの高さ40mの大楠は弘法大師お手植えの7本のクスノキの1本とされ、今も健在である。山手グリーンロードの1.3km西には新堀川を挟んで隣の熱田台地に熱田神宮がある。「田光八幡社」から少し北に進むと「直来神社」がある。木曾義仲が京から追放され、落ちのびて行く途中、桂姫のできものが酷くなりこの地で死んだ。この姫を祭ったのがこの神社の起こりとされ、神木の下で小石をなでると治るといふ。御劔小学校は元高田城跡で「富士八幡社」はその城門の左右の鬼門に当たる場所に建てられた。「尾陽神社」は佐久間家勝が築いた御器所西城跡に徳川義直・義勝を祀るために明治44年に建てられた。街道はここで西に折れて細い道を古渡に向かう。古渡に立つ東別院山門の近くに「古渡城趾」の碑立っており、城は織田信長の父信秀が築いた。国道19号線と名古屋都心環状線が交わる場所の近くに「古渡稻荷神社」があるが、この付近を鎌倉街道が通っていたと伝えられている。

## 7. 古渡～熱田の宮

熱田への道は国道19号線沿いで、美濃路に重なる。美濃路の古渡一里塚の近くに源為朝が創建した伝わる「闇之森八幡社」がある。金山駅の近くにある「金山神社」は承和年間（834～847年）熱田神宮の鍛冶職であった尾崎善光が自らの屋敷に勧進したのが始まりとされる。この付近は熱田神宮の神域北端にあたることから高座結御子（たかくらむすびみこ）神社の末社となり、神宮の欄宜により祭祀が営まれていたと云う。このことから当地は「尾張鍛冶発祥の地」とされ、周辺には古くから鍛冶職人が集まり室町時代後期から江戸時代初期にかけては「金山鑛」と呼ばれる鑛の一大生産地でもあった。「高座結御子神社」の創建は不詳だが、伝承では天武天皇の御世（673～686年）とも、熱田神宮本宮と同時期とも云う。高座結御子神社を含む熱田神宮の境外摂社に関しては、古墳時代の尾張諸勢力の分布との対応を指摘する説がある。この中で、熱田台地の主勢力（断夫山古墳・白鳥古墳や熱田神宮）がその他勢力を吸収した結果、各神社が熱田神宮の神統譜に組み込まれるに至ったと推測されている。特に高

座結御子神社および高蔵公園の周辺では、高蔵貝塚・高蔵古墳群などの弥生時代から古墳時代に渡る遺跡（高蔵遺跡）が知られている。この高蔵遺跡は東西約500m・南北約700mにおよぶ大規模なもので、弥生時代の遺跡としては全国的にも知られるほか、古墳時代としては断夫山古墳・白鳥古墳などの首長墓の造営に直接関与した集団の遺跡とされる。

参考 1) 池田誠一 「なごやの鎌倉街道をさがす」 風媒社 2012

(名古屋大学名誉教授)





私の歩いた鎌倉街道（二村山～古渡）